

対人葛藤状況の親密性、被害性と社会的情報処理の関連

久木山 健 一¹⁾

問題と目的

近年、青年期の適応状態を示す指標の一つとして、社会的スキルおよび社会的コンピテンスに対する関心が高まっている。事実、社会的スキルの不足している者にトレーニングを行い、社会的スキルの改善を目指す社会的スキルトレーニング研究は多く存在している（藤枝・相川, 2001; 後藤・佐藤・高山, 2001; 石川・小林, 1998; 吉田・廣岡・斎藤, 2002など）。また、孤独感や抑うつ、対人ストレスなどの原因として社会的スキル不足を挙げ、その関連の検討を行っている研究も多い。例えば社会的スキルの低い者は、シャイネスが高い（相川, 1999）、孤独感が高い（相川, 1992; 中台・金山, 2002）ことが指摘されている。また、社会的スキルの低い者とうつ病（Lewinsohn, 1974）、ストレス（橋本, 2000; Segrin, 1999）との関連も示唆されている。しかし、社会的スキルが高いとされる行動が何故行われるのか、社会的スキルが高い人の認知的な特徴についての検討は、本邦においてはあまりなされていない事が指摘できる。

相川（2000）では、社会的スキルを考える際に、スキルフルであるとされる行動が生起する過程に着目することの重要性が指摘されている。このような視点の研究としては、Dodgeの社会的情報処理モデルを用いたものが挙げられる（Crick & Dodge, 1994; Dodge, 1986）。Dodgeの社会的情報処理に関連した研究の多くは、以下のような手法を用いて検討を行っている。まず、ビデオ、文章などにより、対人葛藤状況の提示を行う。その後、提示された状況に即して、状況に対して行われる行動が決定されるまでの、以下の6つのステップからなる社会的情報処理プロセスの測定が行われる。①符号化：自己の内外に存在する手がかりを、感覚過程を通じて受容し知覚することが求められる。②解釈：相手がこちらに対して実行した対人反応を解釈する過程であり、「相手は、何故あのように反応しているのか」「相手はあの反応で何を意図しているのか」など、スキーマやスクリプトを照合しながらの手がかりの心的表象化と解釈が行わ

れる。③目標設定：相手の反応を解釈した結果を受けて、眼前の対人状況にいかに対応すべきか、などの対人目標を作るか明確にすることが行われ、不適切な対人目標を打ち立てたり追求したりすることが問題とされる。④反応検索と構築：長期記憶にある行動のレパートリーから状況に適切な反応を検索する。⑤行動選択：検索した反応の中から実際に行動に移す行動を評価し選択を行う。⑥行動実行：対人目標の達成をめざして決定された対人反応を、言語的、非言語的に実行する過程であり、観察される行動の実行のステップである。社会的情報処理理論では、先行するステップが後のステップに影響を与えるプロセスを想定し、最終的な行動の生起を説明するモデルとなっている。

このような具体的な対人葛藤場面を提示した上で社会的情報処理ステップを測定する手法は、濱口・新井（1991）では、場面特殊のアプローチと特色づけられている。このアプローチの利点として、Dodge（1986）では以下の点を挙げている。まず、これまで攻撃性や内向性、シャイネスなどと言った安定した性格特性によって説明されてきた社会的不適応の原因を、詳細に検討することが可能になる利点が挙げられる。また、詳細に検討することによる行動の予測力の高まりや、不適応行動への介入の視点を生み出しやすいことなどが挙げられている。

しかし、こうしたアプローチは、提示する場面の性質に結果が大きく影響を受けることが考えられる。久木山（2000）では、他者からの意図の曖昧な挑発を受ける場面、自発的な主張が望まれる場面を提示し、社会的情報処理の測定を行い、場面の相違により社会的情報処理プロセスに相違が存在することをみだしている。このことより、提示する状況の内容によって、社会的情報処理プロセスが変化することが考えられる。

これまでの社会的情報処理研究では、状況の影響については、主にCrick & Dodge（1994）による社会的情報処理モデルにおいてのステップ1符号化の研究として取り扱われて来ている。例えばDodge & Tomlin（1987）では、攻撃的な子どもはそうでない子どもに比べて、与えられた対人刺激にあてはまらない情報に基づ

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生

き解釈を行うなどの、スキーマに依存する事が多い事がみいだされている。また、対人相互作用の後半に起こった手がかりを元に解釈をしがちであり、最初に起こった手がかりを考慮しない傾向が考えられることがみいだされている。また van Goozen, Cohen-Kettenis, Matthys, & Engeland (2002) では、disruptive behavior disorders (DBD) の子どもは、そうでない子どもに比べて、性的なスライドに注目することが多く、攻撃的なものを含まないスライドへの注視が低いことをみいだしている。これらの研究などから、不適応児は、攻撃的および嫌悪的などの、ある特定のタイプの社会的手がかりに選択的に注目することや、処理の能力や動機を損なったり、社会的手がかりを直接使用することを妨げたりするような社会的やり取りに関する完成されたスキーマを有していることなどがみいだされている。

しかし上記の研究は状況情報の利用および注意過程の適切さについての検討に過ぎず、提示される状況の性質そのものがどのように後の社会的情報処理に影響を与えるかについて検討した研究はあまり存在しない。Dodge, McClaskey, & Feldman (1985) では、児童が仲間関係で適応できるかが問題となりやすい対人葛藤状況の分類を試み、「仲間集団への参加」「仲間の挑発に対する応答」「失敗に対する応答」「成功に対する応答」「社会的期待」「教師期待」の分類をみいだしている。それをうけて、不適応児や攻撃行動の生起の理解には、意図の曖昧な仲間からの挑発場面を提示した上での検討が行われることが多かった。しかし、これまで使用されて来た仲間からの挑発場面などでは、仲間との関係性の強弱などの、状況そのものが持つ要因についての検討を行っているものは少ない。これらの要因は、その後の社会的情報処理プロセスに影響を与えることが考えられるために、検討を行うことが重要であると考えられる。

では、様々な要因を持つ対人葛藤状況のどのような側面に注目することがよいのであろうか。広岡 (1985) は、大学生を対象に、日常的によく遭遇する30種類の対人相互作用場面を、認知された類似性の観点から5~9のカテゴリーに分類させるとともに、各場面を「楽しい-楽しくない」などの12個の両極性形容詞尺度で評定させ、多次元尺度法により親密性、不安、課題志向性、の3つの状況認知次元をみいだしている。このうち、不安の次元に関しては、久木山 (2000) において、状況から受ける不安の喚起の高低によって、社会的情報処理プロセスが異なることがみいだされている。このことより、残り二つの次元に関しても、社会的情報処理プロセスの相違にみられることが考えられる。そのため、状況の親密性、課題志向性により、その後の社会的情報処理がどのよう

に異なるかの検討を行う。

社会的情報処理を検討する行動として、社会的スキルを持つ者が可能となるアサーション、およびアサーションが実行できずに攻撃的な主張になってしまう攻撃的主張、アサーションが出来ずに主張を行わない非主張を捉えることとする。そして、それらの行動および行動の生起に関わる社会的情報処理プロセスが、先に挙げた親密性および課題志向性という状況の要因によってどのように異なるのかについての仮説を挙げる。

まず、親密性についての仮説を挙げる。社会的スキルの一部として、関係を開始するスキル等が挙げられている(菊地, 1988など)。また、アサーションが失敗しやすい場面として、新奇場面などが考えられる。関係の開始および新奇場面とは、相手との親密性の低い状況であり、その場面において観察される行動が異なる場合、それを導く社会的情報処理プロセス自体が異なる事が考えられる。これらのことより、親密性の低い相手の存在する状況の方が、アサーション実行が少なく、アサーションの生起を促すプロセスの存在が少ないことが考えられる。

次に課題志向性についての仮説を挙げる。課題の解決が成功するか否かには、その状況における課題の困難度が関連することが考えられる。そのため、遂行の困難度の観点から、検討する要因を状況から受ける被害の大きさとして扱う。被害が大きいと認識することにより、被害の原因となった相手を否定的にとらえることなどが考えられる。また、被害が大きい場合は、アサーションを行う事によりその被害を小さくしようという目的の元、アサーションを導くプロセスが増大することが考えられる。ただし、被害が大きい事は、課題の解決が困難であることも多いために、アサーションを導かないプロセスも多く存在することが考えられる。

以上のことより、本研究では、状況から受ける親密性および被害性によって、社会的情報処理プロセスにどのような違いがあるのかの検討を行う。

方 法

調査対象者: 大学生1, 2年生を中心とした380名(男性178名, 女性202名)。平均年齢は18.54 ($SD=1.14$)才であった。

質問紙: 相川 (2000), 平木 (1993) を参考に、アサーションが求められる対人葛藤状況(テスト勉強をしようとしている時にノートを貸して欲しいと頼まれる)を提示した。そのうえで、まず、状況の認知として相手との親密性・被害の大きさの測定を行った(5件法)。次に、以下の社会的情報処理各ステップの測定を行った。①解

釈ステップ：濱口（1992），久木山（2002）をもとに，敵意帰属・自責帰属・偶然帰属を測定する目的で作成された9項目に対して，「1. まったくそう思わない」から「6. たいへんそう思う」までの6件法で回答を求めた。

②目標設定ステップ：濱口（1992），久木山（2002）をもとに，友好性目標，主張性目標を測定する目的で作成された7項目に対して，「1. まったくそう思わない」から「6. たいへんそう思う」までの6件法で回答を求めた。

⑤行動実行ステップ：相川（2000）を参考に，自分のことをまず考えるが，相手のことも考慮したアサーション（①「今日，試験勉強する予定なので，今日は貸せない。」と理由をきちんと説明して断る。），②「他の人にノートを貸してもらおうように提案する。」），アサーティブで無く，自分のことだけ考えて，他者を踏みにじる発言を行う攻撃的主張（①「不愉快な顔をして「人のノートを試験前に借りようとするのは虫が良すぎる」と言う。」，②「拒否はしないが不愉快だという表情や態度をして，ノートを乱暴に友だちの前に出す。」），アサーティブでなく，自分よりも他者を常に優先し，自分のことを後回しにするやり方である非主張行動（①「貸したくない気持ちを表情に出さずにぎこちなく笑いながら「いいよ」と言って貸す。」，②「話をはぐらかしながら相手があきらめてくれるのを待つ。」）より各2項目を5件法で測定した。

調査方法：2003年4月に，講義時間を使用して，クラスごとに集団で一斉に実施を行った。なお，調査にあたっては，調査への協力が任意であることを伝え，自由意志での協力を求めた。

結果と考察

1. 測度の検討

(1) 親密性と被害性得点の検討：親密性と被害の相関係数を求めた所， $-.18$ ($p < .01$) で，弱い負の相関がみられた。このことより，親密性が高いと認識することと，被害が低いと認識することにはある程度の関連があることが考えられる。親密性の平均は3.26 ($SD=1.13$)，被害の平均は3.67 ($SD=1.10$) であった。

(2) 社会的情報処理尺度の検討：a) 解釈ステップ尺度の因子分析：解釈ステップ尺度9項目に対して，主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況 (2.57, 1.99, 1.56, 0.77...) より，固有値1以上の基準にもとづき因子数を3と定め，再び主因子法，プロマックス回転を行った結果を Table 1 に挙げる。想定した因子に想定した項目の負荷が高かったため，想定した項目をもとに各下位尺度得点を求めた。信頼性を確認するために α 係数を算出したところ，敵意帰属 .83，自責帰属 .69，偶然帰属 .72 であり，信頼性が確認された。b) 目標設定ステップ尺度の因子分析：目標設定ステップ尺度7項目に対して，主成分法による因子分析を行った。固有値の減衰状況 (2.71, 2.13, 0.67...) および固有値1以上の基準から因子数を2と定め，再び主因子法，プロマックス回転を行った結果を Table 2 に挙げる。想定した因子に想定した項目の負荷が高かったため，想定した項目をもとに各下位尺度得点を求めた。信頼性を確認するために α 係数を算出したところ，友好性目標 .80，主張性目標 .83 であり，信頼性が確認された。c) 反応実行ステップの因子分析：反応実行ステップ6項目に対して，

Table 1 解釈ステップ因子分析結果

	敵意帰属	自責帰属	偶然帰属	
Aさんは，人の気持ちを理解する事の出来ない人である	.86	.04	.02	
Aさんは，相手の事を考えることの出来ない力である	.78	.04	.02	
Aさんは，自分勝手な人である	.72	-.06	-.05	
自分の方も悪い面があるからこのような状況にある	-.04	.95	-.01	
このような状況におちいってしまった原因は自分の方にもある	-.01	.77	-.01	
このような状況におちいらぬように自分が気をつけなかったからである	.07	.41	.05	
Aさんは，迷惑をかけようとしているわけではない	.03	.03	.74	
Aさんは，わざとこのようなことをしているわけではない	.06	.04	.68	
Aさんは，別に悪気があってしているわけではない	-.14	-.07	.54	
因子間相関	I	II	III	
	I	1.00		
	II	.02	1.00	
	III	-.27	-.06	1.00

(注) 負荷量 .40 以上を太字とした。

Table 2 目標設定ステップ因子分析結果

	友好性 目標	主張性 目標
Aさんと、絶交したくはない	.75	.13
Aさんを困らせたくない	.74	-.11
Aさんと、仲良しでいたい	.71	.11
Aさんを、嫌な気持ちにたくない	.66	-.14
Aさんに自分の考えを主張したい	-.02	.84
Aさんに何か言いたい	-.11	.76
Aさんに思っている事を伝えたい	.10	.76
因子間相関	I	II
I	1.00	
II	.15	1.00

(注) 負荷量 .40以上を太字とした

主因子法による因子分析を行った結果、想定された因子をみいだす事ができなかった。そのため、反応実行ステップに関しては、作成された各項目の素点を使用し分析の対象とした。

2. 相手との親密性、状況の被害性による各社会的情報処理測度の相違の検討

相手との親密性、状況の被害性により、社会的情報処理の解釈ステップ、目標設定ステップ、反応実行ステップに相違が見られるかの検討を行う。相手との親密性得点の平均値をもとに、親密性低群、親密性高群を作成し

た。また、状況の被害性得点の平均値をもとに、被害低群、被害高群を作成した。社会的情報処理各測度を従属変数とし、親密性（親密性低・親密性高）および被害性（被害低・被害高）を独立変数とする2要因分散分析を行った。結果を Table 3 に示す。

まず、解釈ステップに関してみていくと、敵意帰属に関しては、親密性の主効果 ($F=18.09, p<.01$) および被害性の主効果 ($F=57.14, p<.01$) がみられた。自責帰属においては、いずれの主効果および交互作用も有意とはならなかった。偶然帰属に関しては、親密性の主効果 ($F=10.12, p<.01$) が有意となり、被害性の主効果 ($F=3.52, p<.10$) が有意傾向となった。目標設定ステップについて見ていくと、主張性目標に関しては、被害性の主効果 ($F=24.94, p<.01$) が有意となった。友好性目標に関しては、親密性の主効果 ($F=17.44, p<.01$) が有意となり、被害の主効果 ($F=2.95, p<.10$) および交互作用 ($F=3.04, p<.10$) が有意傾向となった。行動実行ステップについてみていくと、アサーション1に関して、被害の主効果 ($F=21.27, p<.01$) が有意となった。アサーション2に関して、被害の主効果 ($F=17.65, p<.01$) が有意となった。非主張1に関して、交互作用 ($F=3.48, p<.10$) が有意傾向となった。非主張2に関して、被害の主効果 ($F=2.90, p<.10$) が有意傾向となった。

これらのことより、敵意帰属は親密性が高い時には起こりにくく、また被害が高い時に起こりやすいことが示された。偶然帰属は、親密性が高い時に起こりやすいこ

Table 3 親密性、被害による社会的情報処理各測度の平均値

	親密度低				親密度高				親密度 主効果	被害 主効果	交互作用
	被害低 (N=62)		被害高 (N=140)		被害低 (N=75)		被害高 (N=89)				
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
敵意帰属	3.29	0.85	4.13	1.00	2.92	0.82	3.63	0.98	18.09**	57.14**	0.41
自責帰属	2.82	1.10	2.73	1.08	2.68	1.07	2.50	1.07	2.37	1.30	0.15
偶然帰属	4.63	0.92	4.59	0.85	5.06	0.66	4.75	0.92	10.12**	3.52†	2.25
主張性目標	3.82	0.94	4.44	1.03	3.99	1.08	4.48	1.00	0.80	24.94**	0.34
友好性目標	4.68	0.69	4.39	0.84	4.88	0.74	4.88	0.68	17.44**	2.95†	3.04†
攻撃的主張1	1.64	0.75	1.95	1.13	1.77	1.13	1.80	1.14	0.01	2.02	1.42
攻撃的主張2	1.83	0.85	1.80	1.02	1.62	0.90	1.76	1.01	1.30	0.24	0.71
アサーション1	3.26	1.21	3.73	1.13	3.00	1.17	3.70	1.10	1.37	21.27**	0.82
アサーション2	2.82	1.02	3.43	1.15	2.76	1.16	3.22	1.29	1.05	17.65**	0.31
非主張1	3.25	1.11	2.82	1.33	3.07	1.28	3.18	1.36	0.39	1.18	3.48†
非主張2	1.97	0.89	2.15	1.08	1.86	1.02	2.08	1.18	0.57	2.90	0.01

**... $p<.01$, * $p<.05$, †... $p<.10$

とが示された。主張性目標は、被害が高い時に起こりやすいことが示された。友好性目標は、親密性が高い時に起こりやすいことが示された。また、有意傾向ではあるが、友好性目標は親密性が高い時は被害の多い少ないに関係なく維持されるが、親密性が低い時は、被害の高さによって高低が異なることが考えられる。反応実行ステップに関しては、アサーション1、2において、被害の主効果が見られ、被害が高い時にアサーションの生起も高いことが確認された。被害が高い事により、その被害を軽減しようとする事により、問題の解決を意図したアサーションの生起が高くなることによると考えられる。

3. 状況要因ごとの社会的情報処理プロセスの相違の検討

分析1の結果より、解釈ステップ、目標設定ステップ、行動実行ステップに関しては、状況の要因ごとで相違が存在することが確認されたと考えられる。これらのことより、各ステップ間での、測度間の関連の仕方が異なることが考えられる。そこで、相川(2000)、Crick & Dodge(1994)の社会的情報処理モデルをもとに、解釈ステップ→目標ステップ→反応実行ステップという因果関係の想定を行った。解釈ステップの敵意帰属、自責帰属、偶然帰属それぞれが、目標ステップの友好性目標、主張性目標それぞれ、および反応実行ステップの攻撃的主張1、2、アサーション1、2、非主張1、2それぞれに影響を与える因果を想定した。また反応実行ステップは目標ステップからも影響を受けるという因果関係を想定した。加えて、解釈ステップ尺度の各下位尺度得点間に相関を想定し、構造方程式を用いた逐次モデルを作成した。

親密性、被害の高低によって、上記のモデルの関連の仕方にはどこに相違があるのかの検討を行うために、反応実行ステップの各行動ごとに、先に作成した親密性低群・親密性高群、および被害低群・被害高群での多母集団の同時分析を、統計ソフトウェア AMOS4.0 を用いて行った。モデルの適合度は十分ではなかったが(親密性高低群での同時分析を行ったときの適合度: $GFI = .99$, $AGFI = .82$, $RMSEA = .10$, 被害高低群での同時分析を行ったときの適合度: $GFI = .99$, $AGFI = .77$, $RMSEA = .12$)、解釈の有効性からすべてのパスが存在するモデルを採用することとした。各影響関係の係数をまとめたものを Table 4、影響関係を図示したものを Figure 1~4 に挙げる。

親密性高低による、解釈ステップと目標設定ステップとの関連の仕方の相違についてみていく。親密性低群では、敵意帰属から友好性目標への負の関連が存在してい

る ($-.17, p < .01$) が、親密性高群ではそのような関係はみられていない。友好性目標得点は、親密性の主効果が見られており、親密性の高い群の方において友好性目標が高いことが示されている。親密性が高いと、敵意帰属が高くなっても友好性目標が減少しないためにこのような差が生まれているとも考えられる。親密性低群では、自責帰属から友好性目標への正の関係が存在している ($.19, p < .01$)。親密性低群は高群に比べて友好性目標が低いこととあわせて考えると、親密性の低い状況では、問題の所在を自分であると捉える事がないと、友好的な目標を立てないために、友好性目標が低いというプロセスが存在することも考えられる。親密性低群において、敵意帰属から主張性目標への正の関係 ($.26, p < .01$) がみられた。主張性目標には、アサーションを高めるという適応的な面に加えて、言語的攻撃を高めるという不適応的な側面が存在するための結果であると考えられる。次に、各行動の予測の相違についてみていく。親密性高群において、偶然帰属から攻撃的主張2への負の関係が存在している ($-.29, p < .01$)。親密性が高い状況では、対人葛藤が生じて、それが偶然であると帰属した場合、攻撃的にならないようなプロセスが存在することが考えられる。親密性高群では、敵意帰属からアサーション1への正の関係 ($.28, p < .01$) が存在する。親密性高群では、低群に比べて敵意帰属を行うことが少ないことがみだされている。そのような中で敵意帰属を行った場合、攻撃的主張になることなくアサーションとして表現することが可能であるとも考えられる。親密性低群では、友好性目標からアサーション1への負の関係 ($-.25, p < .05$) および友好性目標からアサーション2への負の関係 ($-.37, p < .01$) が存在している。友好性目標はアサーションの正の予測因であることをみだした研究が存在するが(濱口, 1992)、親密性が低い場合、アサーションを妨げる働きも存在することも示唆された。これらのことは、親密性が低い状況でアサーションを行うことを良しとしない傾向の存在などが考えられる。今後アサーション権などとの関連において検討して行くことが考えられる。親密性が低い場合、自責帰属と非主張2への正の関係が存在している ($.23, p < .01$)。また、親密性が高い場合、自責帰属から非主張1への正の関係が存在している ($.30, p < .01$)。非主張1は結果的に本を貸すという行為であり、非主張2は相手の気づきを要求する行為である。親密性が高い場合は、問題の原因に何らかの自分の関与があると帰属した場合に、本を貸す行為に出るが、親密性が低い時は、すぐに本を貸すことはしないという違いが存在すると考えられる。

被害の高低による解釈ステップと目標設定ステップと

対人葛藤状況の親密性、被害性と社会的情報処理の関連

の間の関連の相違についてみていく。被害高群においてのみ、敵意帰属から友好性目標への負の関係が存在している ($-.19, p < .01$)。被害が低い場合は、敵意帰属が行われても、友好性目標が下がるというプロセスが起き

にくいことが考えられる。次に、各行動の予測についてみていく。被害が低い時にのみみられた関係として、自責帰属から攻撃的主張 1 への正の関係 ($.18, p < .05$)、自責帰属から攻撃的主張 2 への正の関係 ($.18, p < .05$)、

Table 4 モデルのパス解析による係数の一覧

			親密度低	親密度高	被害低	被害高
パス係数						
敵意帰属	⇒	主張性目標	.26**	-.02	.13	.03
自責帰属	⇒	主張性目標	.10	.05	.04	.08
偶然帰属	⇒	主張性目標	.11	-.11	.13	.01
敵意帰属	⇒	友好性目標	-.17**	-.05	-.10	-.19**
自責帰属	⇒	友好性目標	.19**	.06	.13*	.12*
偶然帰属	⇒	友好性目標	.37**	.31**	.44**	.32**
敵意帰属	⇒	攻撃的主張 1	.06	.05	-.02	.03
自責帰属	⇒	攻撃的主張 1	.14	.10	.18*	.09
偶然帰属	⇒	攻撃的主張 1	-.20	.03	-.03	-.13
主張性目標	⇒	攻撃的主張 1	.21**	.30**	.30**	.22**
友好性目標	⇒	攻撃的主張 1	-.31**	-.55**	-.36**	-.41**
敵意帰属	⇒	攻撃的主張 2	.14	.10	.12	.13
自責帰属	⇒	攻撃的主張 2	.15*	.08	.18*	.06
偶然帰属	⇒	攻撃的主張 2	-.17	-.29**	-.19	-.23**
主張性目標	⇒	攻撃的主張 2	.02	.07	.13	.04
友好性目標	⇒	攻撃的主張 2	-.18	.00	-.12	-.09
敵意帰属	⇒	アサーション 1	.03	.28**	.31**	.02
自責帰属	⇒	アサーション 1	-.01	-.01	-.01	-.03
偶然帰属	⇒	アサーション 1	.00	-.02	-.09	.01
主張性目標	⇒	アサーション 1	.46**	.29**	.38**	.30**
友好性目標	⇒	アサーション 1	-.25*	.09	.14	-.23*
敵意帰属	⇒	アサーション 2	-.08	.16	.30**	-.16
自責帰属	⇒	アサーション 2	.10	-.01	-.02	.08
偶然帰属	⇒	アサーション 2	-.01	.12	.12	-.01
主張性目標	⇒	アサーション 2	.24**	.27**	.29**	.15
友好性目標	⇒	アサーション 2	-.37**	.02	-.17	-.26*
敵意帰属	⇒	非主張 1	.05	-.06	.00	.05
自責帰属	⇒	非主張 1	.01	.30**	.22*	.11
偶然帰属	⇒	非主張 1	-.12	-.22	-.18	-.10
主張性目標	⇒	非主張 1	-.11	-.29	.01	-.26**
友好性目標	⇒	非主張 1	.44**	.53**	.18	.51**
敵意帰属	⇒	非主張 2	.09	.15	.03	.10
自責帰属	⇒	非主張 2	.23**	.13	.32**	.11
偶然帰属	⇒	非主張 2	-.16	-.17	-.06	-.21*
主張性目標	⇒	非主張 2	.02	.11	.24**	-.02
友好性目標	⇒	非主張 2	-.16	-.08	-.34*	-.04
相関係数						
敵意帰属	⇔	自責帰属	-.08	.08	.14	-.04
敵意帰属	⇔	偶然帰属	-.18**	-.29**	-.17**	-.27**
自責帰属	⇔	偶然帰属	-.01	-.02	-.07	-.01

**... $p < .01$, * $p < .05$, †... $p < .01$

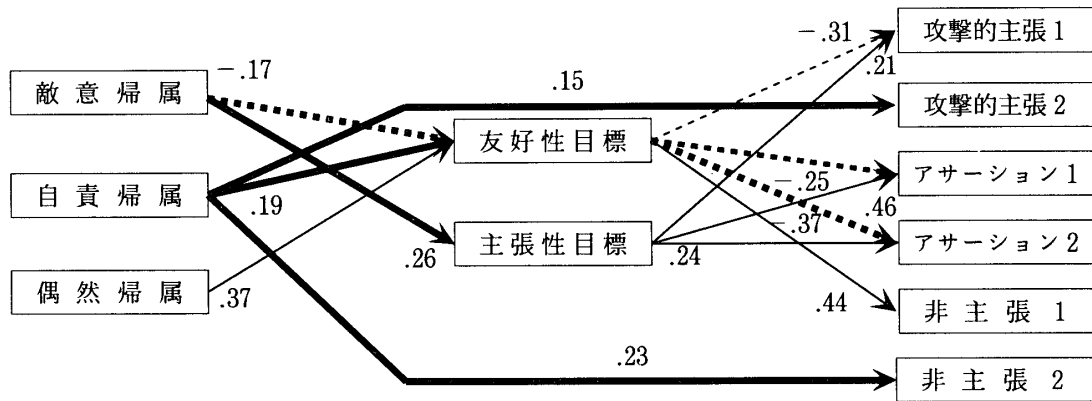


Figure 1 親密性低群のパス図

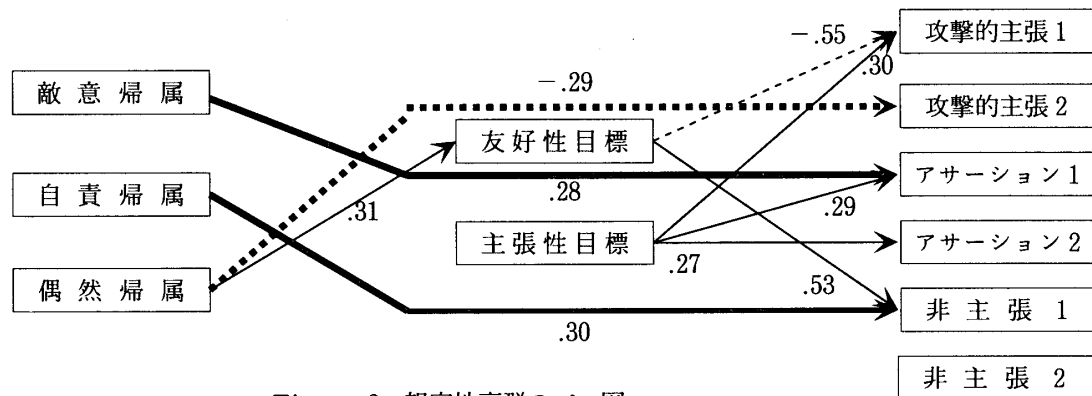


Figure 2 親密性高群のパス図

(注) 5%水準で有意なパスのみ記述した。群毎で特有のパスを太線とした。

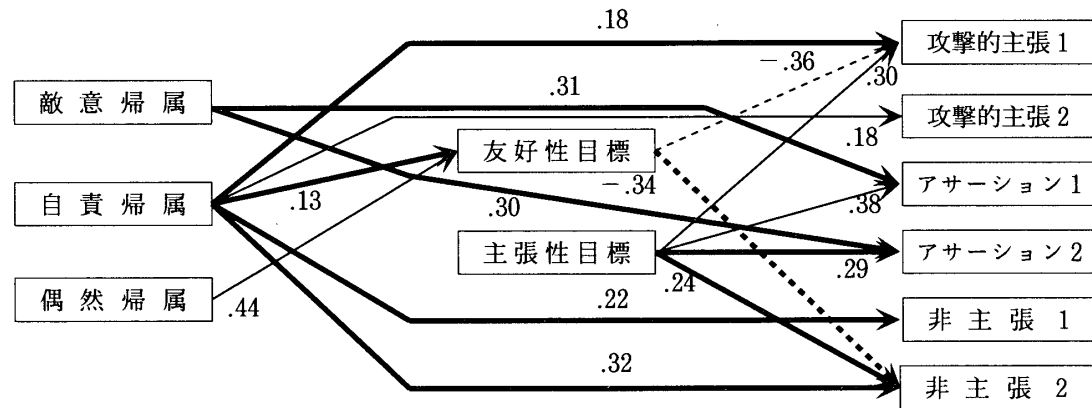


Figure 3 被害低群のパス図

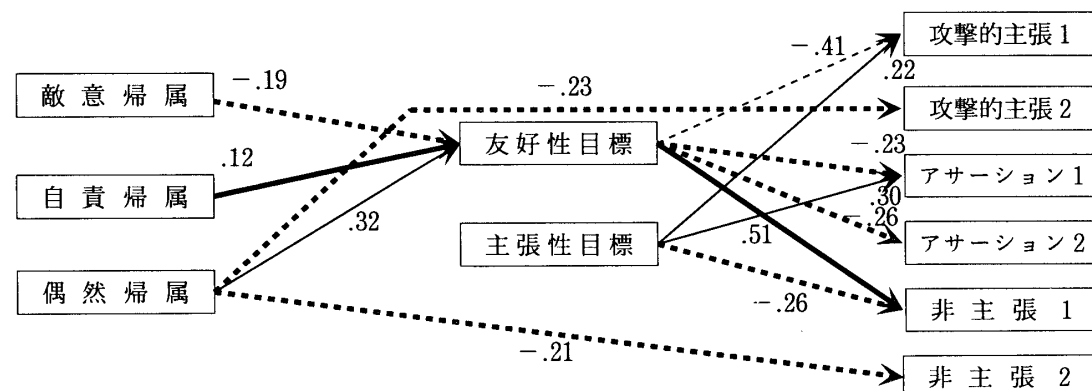


Figure 4 被害高群のパス図

(注) 5%水準で有意なパスのみ記述した。群毎で特有のパスを太線とした。

敵意帰属からアサーションへの正の関係 (.31, $p < .01$), 敵意帰属からアサーション2への正の関係 (.29, $p < .01$), 自責帰属から非主張1への正の関係 (.22, $p < .05$), 自責帰属から非主張2への正の関係 (.32, $p < .01$) が存在している。被害の低い状況で問題の所在が自分にあると帰属することで、アサーション以外の行動の高さが予測されており、被害の低い状況において自責帰属を行うことが不適応的であると考えられる。被害高群においてのみみられた関係として、まず偶然帰属から攻撃的主張2への負の関係 ($-.23$, $p < .01$) が存在するが、被害低との係数の差が大きくないので考察は控える。友好性目標からアサーション1への負の関連 ($-.23$, $p < .01$), アサーション2への負の関連 ($-.26$, $p < .05$) が存在している。被害が大きい状況でも、友好性目標がある場合はアサーションを行わないことが考えられる。被害低群において敵意帰属からアサーション1への正の関連 (.31, $p < .01$) およびアサーション2への正の関連 (.29, $p < .01$) が存在していること、および被害高群において友好性目標から非主張1への正の関係 (.51, $p < .01$) があることとあわせて考えると、本邦においてアサーションが攻撃的主張と混同されていることが現れているとも考えられる。なお、被害低群のみに、主張性目標から非主張2への正の関係 (.24, $p < .01$) がみられている。被害が低い状況において、相手の要求を受け入れられない事は、何かしらの主張的な目標の元に行う事も考えられ、そのためこのような結果が導かれたとも考えられる。しかしこの点などから、被害の操作および行動実行ステップの項目選択の手法などについて再検討する必要があると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、状況の親密性および被害性により、その後の社会的情報処理にどのような相違が存在するのかの検討を行った。その結果、親密性、被害性のいずれにおいても、その後の社会的情報処理に相違がみられた。

親密性による社会的情報処理の相違に関しては、親密性高群において、敵意帰属の低さ、偶然帰属の低さ、友好性目標の高さなどの、アサーションを導く要因が多くみられたが、アサーション実行が高いという差はみられず、仮説は一部しか支持されなかった。本研究において使用された状況は、相手のとの親密性の如何に関わらず、アサーションを行うことを調査協力が望まないものであったものであることが考えられる。本研究で使用した状況よりも、よりアサーションが望まれる状況を使用するなどの改善が望まれよう。

被害性による社会的情報処理の相違に関しては、被害

性高群においてのみ、友好性目標からアサーション実行への負の影響がみられており、社会的情報処理プロセスの相違からはアサーションの実行の高さを説明することは出来なかった。このことより、本研究で使用したアサーションが、適切な主張ではないと捉えられていることが考えられる。しかし、本研究において使用された状況は、被害性の如何にかかわらずアサーションを行うことを調査協力が望まないものでもあったことが考えられる。そのため、被害が高い状況においても、友好性目標が高い者においては、アサーションを行わずにすむというプロセスを示していることが考えられる。

以上の結果は、濱口・新井 (1991) による場面特殊性が確認されたこととも考えられるが、それに加えて、今後の社会的情報処理研究において、提示する状況の要因をコントロールすることの重要性を示す結果であると考えられる。ただし、本研究では、提示する状況文の内容を変更することによる要因のコントロールを行ったわけではなく、状況を提示した上で親密性、被害性の評定を行う方法を用いている。このことは、社会的情報処理モデルの内、ステップ1「符号化」およびステップ2「解釈」を経た上での測定であるとも考えられ、それゆえ後の社会的情報処理の相違との関連が強かったとも考えられる。今後、状況要因のコントロールを提示する状況自体で行うなどによる検討を行う必要があると考えられる。

文 献

- 相川充 1992 大学生における孤独感と自尊心、シャイネス、社会的スキルとの関係 宮崎大学教育学部紀要 (教育科学) (宮崎大学教育学部), 72, 15-26.
- 相川充 1999 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的研究 社会心理学研究, 14, 96-105.
- 相川充 2000 人づきあいの技術 —社会的スキルの心理学— セレクション社会心理学20 サイエンス社
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1994 A review and reformation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Dodge, K. A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter, (Ed.), *The Minnesota Symposium on Child Psychology*, 18, Lawrence Erlbaum. Pp.77-135.

- Dodge, K.A., McClaskey, C.L., & Feldman, E. 1985 Situational approach to the assessment of social competence in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 344-353.
- Dodge, K. A., & Tomlin, A. M. 1987 Utilization of self-schemas as a mechanism of interpretational bias in aggressive children. *Social Cognition*, **5**, 280-300.
- 藤枝静暁・相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, **49**, 371-381.
- 後藤吉道・佐藤正二・高山巖 2001 児童に対する集団社会的スキル訓練の効果 カウンセリング研究, **34**, 127-135.
- 平木典子 1993 アサーション・トレーニング - さわやかな<自己表現>のために - 日本精神技術研究所.
- 濱口佳和 1992 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 教育心理学研究, **40**, 224-231.
- 濱口佳和・新井邦二郎 1991 児童の社会的コンピテンスへの接近法についての考察 - 場面特殊の内潜的過程アプローチの提唱 - 筑波大学心理学研究, **13**, 185-202.
- 橋本 剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, **48**, 94-102.
- 廣岡秀一 1985 社会的状況の認知に関する多次元的研究 実験社会心理学研究, **25**, 17-25.
- 石川芳子・小林正幸 1998 小学校における社会的スキル訓練の適用について - 小集団による適用効果の検討 - カウンセリング研究, **31**, 300-309.
- 菊地章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 久木山健一 2000 社会的情報処理と情動の関連に関する研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科修士論文 (未公開)
- 久木山健一 2002 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連 - アサーション行動を対象として - カウンセリング研究, **35**, 66-75.
- Lewinsohn, P. M. 1974 A behavioral approach to depression. In R. J. Freedman, & M. M. Katz, (Eds.) *The Psychology of depression: Contemporary theory and research*. Winston-Wiley. Pp.157-178.
- 中台佐喜子・金山元春 2002 幼児の社会的スキルと孤独感 カウンセリング研究, **35**, 237-245.
- Segrin, C. 1999 Social skills, stressful life events, and the development of psychosocial problems. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 14-34.
- van Goozen, S.H.M., Cohen-Kettenis, P.T., Matthys, W., & Engeland, H. 2002 Preference for aggressive and sexual stimuli in children with disruptive behavior disorder and normal controls. *Archives of Sexual Behavior*, **31**, 247-253.
- 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 2002 21世紀型授業づくり48 教室で学ぶ「社会の中の人間関係」 - 心理学を活用した新しい授業例 - 明治図書.
(2003年9月30日 受稿)

ABSTRACT

The Relations between Social Information Processing and Situational Factors.

Kenichi KUKIYAMA

The purpose of this study was to examine the relations between social information processing and situational factors. 380 college students completed the questionnaire, consisting items on familiarity of situation, damage from situation and social information processing scales (attributional bias step, goal clarification step and response enactment step).

In terms of familiarity of situation, people who were high in familiarity towards peers were low in hostile attribution score but were high in both incidental attribution and friendship goal score. People who suffered highly from situation had high scores concerning hostile attribution, assertive goal and assertive behavior factors. Social information processing patterns varied with different situational factors.

Key words: social information processing, situational factor, college student.